

『思い思いの若者たち』



<ひきこもりは“炭鉱のカナリヤ“か>

法人理事 布袋 太三

私は昨秋の小さな講演会で「ひきこもりは“炭鉱のカナリヤ“か」という話に触れた。

これは炭鉱で万一有毒ガスが発生すると人間より先にカナリヤが察知してさえずりを止めるということから、何かの危険が迫っていることを知らせる前兆を指す言葉なんだが、それではひきこもりはどんな危険を知らせようとしているのかについて私は話した。

結論から言うと、利潤獲得のためにスピード効率を果てしなく追い求める現代の社会の風潮はどんどん非人間的になっていくと告発しているのかもしれないというようなことを言った。

もちろんひきこもりの青年たちは社会にポジティブに対峙することはあまりない。

むしろ、社会の流れにうまく適合したいと願っていてそれがうまくできないがゆえにひきこもる青年が多い。本当はちゃんと社会の担い手として社会に貢献したい。みんなと一緒に働きたいと素朴に願う善良さに満ちた青年たちなわけで、反社会の狼煙とはほぼ無縁なんだ、と。

しかし、身体と精神がこの社会で疲弊させられてしまい、存在自体が非社会的な見え方なので、それで先に言ったような警告的存在と見る人もいるのだというような話をした。

重ねて言うが、ひきこもりの青年が社会的な事象への批判的な論評を口にするには非常に少ない。それでも“炭鉱のカナリヤ“的に言われることがあるのは、やはりひきこもりというのは個人的問題というよりは社会的問題として理解すること

が大事だと人々は気がついているからである。

ひきこもりは当事者たちの心性が内向き傾向であったとしても、そのことで個人的問題に帰すことはできない。まさしく社会によって「ひきこもりにさせられた」というのがこの問題の機序が指し示す本質だと言える。

彼らは自分たちが社会に背を向けざるをえなかったきっかけについてあまり定かに語ろうとしない。その会社や学校の組織や仕組みや人間関係の存り様の何かを自らの躓きの要因として語り出すことは相当に苦手である。

そこで私たちは彼らの少ない言葉を拾い集め、エピソードをつなぎあわせながら時間をかけて彼ら自身の物語をゆっくりと編み上げていくことになる。そして、自らを他人に少しでも語れるようになって、次の飛翔のチャンスを何うツールの獲得へと向かうサポートが私たちの仕事となる。

気の遠くなるような話だが、現代社会が希望ある未来社会への脱皮に向かうまで私たちとひきこもりはこうした地味な営為を重ねつづけることとなるのだ。



スタッフ紹介



浅井 みづほ

昨年 8 月より若者サポートステーションで働かせていただいています。

私自身、相談業務の経験等なく、『こちらで働かせていただきたい』という自分の素直な思いのみで何とかこちらに辿り着く事が出来ました。慣れない事に戸惑いもありますが、若い方々の小さな「やってみよう！」という思いを大切し、その芽を潰す事のないよう応援出来ればと思っています。そのためには、たくさんの出来事から学び続けて自分自身を成長させたいと思います。

皆様、ご指導の程、よろしく願いいたします。



永井 亮平

昨年 12 月から南紀若者サポートステーション相談支援員として働いている永井亮平です。

なにかしなないといけない。でも何をすればいいかわからない。

答えが出ないまま眠れない夜を何度も過ごしてきました。だからこそ同様の悩みを抱えた方たちの力になりたいと思い、ここにいます。

未だ不慣れではありますが微力を尽くしますので、よろしくお願い致します。



切里 恵美

昨年 12 月より就労準備支援員として働かせていただいています。

主に内職や菓子工房での作業を通じて、就労に至るまでの、生活リズムや基本的なコミュニケーションの取り方などを身につけていけるようにサポートをしています。お菓子作りは大好きなので、利用者さんと共に楽しく作業をさせていただいています。

一人ひとり違う、それぞれの課題を乗り越え、就労に向けて歩めるように利用者さんをよく見て、寄り添い考え、信頼されるスタッフになりたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。